
アンダーワールド

エンデバー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アンダーワールド

【Nコード】

N9781E

【作者名】

エンデバー

【あらすじ】

最悪のシナリオ、築かれる屍の山、荒れ果てた大地、崩壊した建造物、世界は今人類の罪が蔓延している。西暦2500年、地上は機械に支配され人類は地下世界へと追いやられてしまった。やがて、人類が社会をなす地下世界はアンダーワールドと呼ばれるようになった。人類は地上を奪還するため、椿大学で開発された一体の高性能ヒト型ロボットで、殺戮の主ファイルに戦いを挑む。果たして、人類は地上を奪還できるのか。

プロローグ

春風に淡いピンクの花びらが舞っていた。それはまるで、冬の雪のようにひらひらと宙を舞っている。一片の桜の花びらが、女の髪に付着した。女はそれを取り掌に乗せると、ふっと息を吹きかけ宙へ飛ばした。不意に彼女の頬を涙が伝う。

女は隣を歩くヒト型のロボットと共に、桜並木の通りを歩き続けた。そこを抜けると、まるで、ハリケーンでも通り過ぎたような荒れ果てた大地が広がっていた。森は焼け野原となっており、建造物は崩壊していて、瓦礫の下には何体ものロボットや、人間の死体が転がっていた。それらは生々しく、痛いほどに戦火の爪あとを痛感し、胸が締め付けられるように苦しくなった。

「やっと終わったんだね……。長かった、あたしたちの戦いが」

女は荒れ果てた荒野を眺め、ぽつりと呟いた。

「ソウデスネ」

ロボットは言った。

「エル、あなたは一度死んだ。でも、あなたがあたしたちの世界を取り戻してくれたのは、間違いないわ。ありがとう」

沙柚はエルのほうに身体を向け言った。目の前に立っているロボットは、すっかり傷ついている。左目は青い光を失っており、機能を果たしていない。ロボットの身体は、傷だらけで所々は赤黒くなっていたり、凹んでいたりする。

「イエ、僕ハ沙柚ニ従ツタマデデス。ソレニ、約束シタデシヨ。コノ世界ヲ案内シテクレルツテ。僕ノ記憶ニハシツカリ残ツテイマス」

エルはとんとこめかみを叩いた。

「そうね」

沙柚はふと笑みを漏らした。

深く息を吸い込むと、春の香りが肺一杯に満ちた。

「あたし思うの、この世界は本当にあたしたちの世界なんだろうか。だってもうみんないないのよ。あの頃の、それこそ幻想だった世界だったけど、あたしたちは確かに人と触れられていた。だけど、今のこの世界はもうほとんど人はいない」

沙柚の眼前に広がるのは、荒れ果てた荒野だけだ。誰一人として人はいない。沙柚は荒野に向って、ゆっくりと歩き出した。

その時は、西暦二千五百年だった。人は地下深くに追いやられ、地上を支配するものは機械となっていた。人の生み出したものによって地上が支配されてしまつと一体誰が思ったことだろうか？ 愚かとしか言いようのない結果であった。

そして人類の、最悪の物語が幕を開けたのだった。相容れない存在は、世界を血と悲しみの世界に染めた。人は嘆き苦しみ、そこに平和という言葉は存在しなかった。存在するものは、全て幻で作られた世界だったのだ。

1章 1

薄暗い研究所で、突然ロボットが暴れた。それはぎこちない動作で、腕を振り回し、意味不明な動作を繰り返して、研究所を動き回っている。その姿は、駄々を捏ねる子供のようなのだ。

「またやっちゃった。クソ、なんで俺たちがこんなことに」

三宅元はゴーグルを外してばやいた。幾度目かの失敗を重ね、とうとう嫌になりだしていた。

「また失敗のようね。この研究は班での連帯責任なんだから、ちゃんとしてよね」

福本千佳はやれやれといった顔で、ため息をついた。

元はロボットにICチップを組み込もうとしたが、それを誤って別の場所に組み込んでしまった。そのせいで、ロボットが暴走を始めてしまったのだ。複雑に回路が収集されている中、寸分の狂いも許されない僅かな隙間にICチップを組み込むのは困難を極めていた。その際、誤って回路を傷つけてしまえば、また最初からやり直しになるのだ。

千佳は暴れるエルの背中のボタンを押し、ロボットのスイッチを切った。これで数度目となる元の失敗に、半ば呆れ気味の様子であった。元はチップを抜き取った。

椿大学の研究施設では、ロボットに関する研究を密かに行っていた。機械に関する研究は、本来行つてはいけないのだが、元と

千佳はその研究に携わっている。

「それはわかってる。違うんだ、俺が言いたいのはそんなことじゃない」

「なにムキになってんのよ。それじゃ何が言いたいわけ」

「福本はどうして、そう平気な顔してられるんだ。俺たちは、地上を捨てざるを得なかったんだぞ。機械なんかに地上を奪われて、悔しくないのか」

「そりゃ悔しいわよ。地上に戻りたいしね。でも……」

千佳はため息をついて、顔を上に向けた。

「一年もここにいて、なんていうか、慣れちゃったかな。地下世界も悪くない気がするし」

元は握った拳で、壁を思いつき叩いた。それに驚いたのか、千佳は慌てて元に視線を戻した。

「俺は地上に帰りたい。機械どもなんかぶっ壊してやる」

そう言っ、元は扉に向かって歩き出した。

「ちょっと、どこ行くのよ」

「少し休んでくる。今は研究っていう気分じゃないんだ」

元は研究所を出ていった。

数年前、ある博士によって造り出されたロボットが、今や地上の頂点に君臨している。その人工知能搭載高性能ヒト型ロボットの名は、フィルと言い、過去に例を見ないロボットであった。

フィルは人類の予想を遥かに超えた力で、地上を圧倒していった。知能、戦闘力、俊敏性、破壊力など全てにおいて、フィルは人間をはるかに凌いでいた。コンピューターはフィルによってプログラムを操られ、人間社会は混乱を極めた。社会の九割ほどがコンピューターによって統制されていたため、機械に頼りっぱなしであった社会がそうなるのは至極当然のことだった。人間はあまりにも機械に頼りすぎていた。

混乱の最中、フィルは容赦なく猛威を振るい、たった一体のロボットがいつの間にか地上を支配するまでに至ったのだ。フィルによって築かれた屍の数は、優に数百万人を越えている。

「機械と、人間の共存をここに誓う。もう人類の大量殺戮は止めてくれ。私たちはもう、機械をいいように、都合よく使ったりしないから」

日本の本馬総理は、機械に向かって頭を下げた。なんとも滑稽で情けない姿だった。一体全体なにが悲しくて、機械なんかに頭を下げねばならないのか。

「ソナ言葉ニ、騙サレナイ。オ前タチ人間ハ機械ヲ都合ヨク使イ、ソシテ必要ガナクナレバ廃棄シテキタ。オ前タチノ言葉ハ信ジラレナイ」

全くの感情のこもっていない声が、本馬に向けられた。総理はぎ

ゆつと唇をかみ締めた。

「ではどうすれば……」

本馬が乞うように言うと、フィルはしばらく黙った。

「大量殺戮ハ止メテヤル」

その言葉に、本馬は安堵の色を浮かべた。しかしそれも束の間である。

「タダシ、条件ガアル。オ前タチ人間ハ、地下ヘ行ケ。地上ハ、我々ガ支配スル」

「そんな条件呑めるわけが……」

「ダツタラ大量殺戮ヲ続ケル。命ヲ捨テルカ、地上ヲ捨テルカダ」

本馬は再び唇を噛んだ。人類の恥と、悔しさが顔一杯に滲み出ていた。

「わかった……」

渋りながらも、やがてその条件を呑んだ。この時、全人類が我が耳を疑ったことだろう。

「地下ニ追イヤルカワリニ、最低限必要ナモノハ、我々が用意シヨウ。地下世界ヘ行クマデノ猶予ハ、二年間ダ。ソレマデ我々ハ、人間社会ニ手ヲ出サナイ。愚力者ドモヨ、後二年、地上ノ世界ヲ、満喫スレバイイ」

フィルと人類の間で取り交わされた調停。それは、人類が地上を捨てるということだった。本馬にしても苦渋の選択だったに違いない。人類の滅亡を覚悟して、機械に頭を下げるくらいならフィルと戦っていくのか、機械に頭を下げて、支配関係がひっくり返りながらも生にしがみつくのか。

彼は後者を選択したのだ。妥当な選択だ、と元はその中継を観ながら思った。人類がフィルに戦いを挑んでも、勝てる見込みがない一方で、無様な姿でも生きていれば、常にチャンスを探い敵の隙について、僅かな可能性でも地上を奪還するということも可能なのだ。

本間は調停を結んだ二週間後に自殺した。官邸で首吊り自殺を図った。遺書には、『機械に負けた』とだけ書かれていた。その後、遠山和人が総理に就任した。彼は若干三十歳で、史上最年少で総理に就任した。また、史上最悪の総理就任劇とも言われた。

地下世界への移行は、着々と準備が進められた。フィルは、自分と同じような高性能ロボットを造作なく造っていた。ヒト型だけでなく、ネコやイヌの形、また空をも飛ぶ鳥やドラゴンのような形など、実に様々な形態のロボットを造りだした。

それと同時に、地下世界の開発も、とんとん拍子で進んでいた。もちろん、人の手ではなく全て機械が手がけてのことだ。

やがて人間が地下へ追いやられる日がやってきた。フィルの与えた二年間は、全世界の人間にとってどんなものだったのか。少なくとも、元にとってはただ機械に怯えるだけの二年間だった。そして心のどこかで、人間の招いた結果を恥じていた。

だが一方で、地上を取り返してやろうという強い思いも芽生えていた。それは、あの忌まわしい出来事が事の発端だった。

地下世界は、公共交通機関に始まり学校や会社と、まるで地上の世界をそのまま地下に移したような世界が広がっていた。電力も供給されている。フィルが誓ったように、最低限必要なものは整っていた。生活だけであれば、なに不自由なく暮らしていけるだろう。ここから更に発展させるかどうかは、人間の手にかかっている。

地下に追いやられた人間は、太陽を浴びることなく、地上の機械に怯えながら地下世界でひっそりと暮らすことになった。その世界は、いつしか「アンダーワールド」と呼ばれるようになった。名前はカッコいいかもしれないが、経緯を思えばとんでもなくカッコ悪い。

光を失った世界、人の過ちを顕著に示した世界、その結果が「アンダーワールド」である。

夢の世界に割り込んでくる、うるさい電子音。元は目を擦りながら、もう片方の手で目覚まし時計を止めた。大きな欠伸を一つして、時計に目をやると針は午後六時をさしていた。

「しまった！」

言いながら、元は慌てて飛び起きた。少し眠るつもりが、ぐっすりと眠ってしまった。

四時に研究の発表があつたのだが、もう終わっているはずだ。着替えて仮眠室を出ると、元は神谷教授の元に向かった。

扉をノックして、返事が返ってきたことを確認すると、元は扉を

開いた。神谷は椅子に座り、手に持った資料に目を通していた。机の上には、どっさりと研究資料が積まれていた。

「どうしたのかな？ 今日の発表会、君だけ来ていなかったようだが。気分でも悪かったのか」

「すみません。体調が優れなかったようで」

元はウソをついた。

「それなら仕方がない。君の班の発表は見送った。全員が揃っていないと意味がないからな。研究の方はどうかな？」

神谷は資料から目を外し、元へと視線を移した。

「後少しです。後少しで、エルが完成しそうです」

「そうか」

神谷は満足げに頷いた。

元たちは自分たちの造っているロボットを「エル」と名付けている。以前、どうしてエルと名前をつけたのか、名付け親である元は千佳から聞かれたことがあった。その時元は、エルはヘブライ語で神を意味する。人知を超えたロボットには相応しい名前だと答えた。

元たちが苦勞しているのは、フィルのように機敏な動きを出すことだった。その課題だけが、どうしてもクリアできない。

エルは人工知能搭載高性能ヒト型ロボットで、その設計は限りな

くフィルに近い。しかしどうして、フィルに限りなく近いロボットを作り出せる知識が、神谷にあるのだろうか。

神谷の授業の受講生の何人かは、ロボット研究に携わっている。それに拍車をかけたのが、彼の

「フィルのようなロボットを造って、地上を取り返そう」

という発言だった。その言葉に、元も火がついたのである。そしてこの四月から、ロボット研究のゼミが始まった。その目的は、「フィルのようなロボットを造って地上を奪還する」という目的である。しかし今となつては、千佳のようにその情熱は薄れてしまっていて、元のように本気である学生は数少ない。本当に熱の入っている学生は、元を含めて数人足らずである。

「教授はどうしてロボット研究を行おうという気になったのですか。こんなことがヤツらにバレてしまったら、間違いなく殺されますよ」

「地上を、私たちの生活の場を取り戻すためだ。そのためには、フィル以上のロボットが必要となってくる」

神谷は真剣な眼差しだった。彼の地上を取り戻したいという気持ち、本物だ。

「そうですか。僕はあなたの研究に携われて、光栄に思います。必ず地上を取り返ししょう」

元が言うと、神谷は神妙な顔つきになった。異変に気づいた元が訊いた。

「どうかなさいましたか？」

「いや、なんでもない」

神谷はゆらゆらと首を振りながら答えた。

「地上の様子は今、誰もわからないだろう。ロボットが出来上がり次第、地上の調査に向かわせよう」

「はい。あの、一つお聞きしても宜しいですか」

「なんだね」

「教授はどうして、あの時フィルのようなロボットが作れるとおっしゃったのですか。フィルは人工知能搭載高性能ロボットで、天才と謳われた佐伯博士が造ったものでしょう」

「これを見りや誰だつて造れるさ」

神谷は手に持っている資料を、元のほうに向けひらひらさせた。目を凝らしてよく見ると、驚いたことにそれはフィルの設計図だった。

「ど、どうしてそれを」

元は思わず吃ってしまった。

「そうだな。もう隠す必要はないな。私は昔、佐伯博士の研究の助手として、フィルの開発に携わっていたんだ」

人の進化は、時として世に恐怖を生み出す。その恐怖は、人知を越えたものとなり、支配を強め、やがて人は自ら生み出した知恵の産物に食われていく。

求めれば求めるほどに人は進化していき、そして新たなものを生み出していく。

そしてここに一人の天才博士によって、新たな恐怖が産み落とされた。それが、やがて世界の脅威になるとは、誰が思っていたことだろう。

「完成だ。やっと完成したぞ」

佐伯博士が歓喜の声を上げた。研究に研究を重ね、やっと完成した代物だ。ここまで来るのに十年もの時を要した。

「やりましたね」

助手の神谷がパチパチと手を叩きながら、佐伯に近寄った。

「このロボットさえあればなんでも可能だ。世界を滅亡させることもな。まあ、そんなことに使おうとは思わんが」

佐伯は完成したてのロボットに目を向けた。メガネの奥で光る瞳は、まるで子供のようにキラキラと輝いていた。

人工知能搭載高性能ヒト型ロボット、「フィル」。佐伯博士のあ

らゆる知識が凝縮された集大成である。人の形を模したロボットで、その動きは機敏かつ人以上の反応を示す。またブレインICチップが組み込まれており、知識は人より遥かに高い。

ブレインICチップとは、様々な偉人や知識人から抽出された知識が凝縮されたメモリである。これをロボットに組み込むことによって、人工知能を持ったロボットが出来上がるというわけだ。つまり、ICチップは人という脳の役割を果たしているわけである。そして、ロボットの心部となる。

インプットされていない言動やプログラムがあれば、ブレインICチップを基に、機械が勝手に作り出していく。そしてそれらのデータは、もう一つの空白のICチップ、ブランクICチップに記憶されていく。これらのICチップがあるかないかで、ロボットの能力は格段に違ってくる。

「起動させてみましょうよ」

神谷が言った。佐伯は大きく頷いた。

佐伯がロボットの背中に位置する起動ボタン押した。ロボットの瞳が、緑色の光を帯びやがてゆっくりと動作を開始した。

「やあ、僕がキミの生みの親だ。キミの名前はフィル。よろしく」

佐伯はロボットに向かって声をかける。

「フィル……。僕ノ名前ハ、フィル」

ロボットはゆっくりと繰り返した。

「そうだ。フィル、キミはこの世界で人のために従事するという、立派な大役がある。そのために生まれてきたのだ」

「ハイ、了解イタシマシタ」

フィルは膝をつき、頭を深く下げた。その姿は、王に忠誠を誓う兵士のような。佐伯はうんうんと満足そうに頷き、

「完璧だ。完璧すぎる。見るに、落ち度などどこにもない。これで僕は世界一の博士だ」

と神谷のほうに振り返って、たいそう満足そうに言った。自信と喜びに満ちた顔は、すっかり自身に陶醉していた。

「あなたは世界一の博士です。あなたの助手を勤めさせていただいき光栄に思います」

神谷は、右手を白衣のポケットに突っ込み、その中にある機械のボタンを押した。

「博士、ロボットが……」

神谷の声は震えていた。彼は装ってそんな風な声を出した。

「なんだ？」

佐伯はロボットのほうに振り返った。瞬間、彼の顔は驚きに変わっていた。

「お、おい！ それをしまえ。僕にそんなものを向けるな」

佐伯は怯えの色を浮かべながら、叫んだ。

フィルは右手を刃の形に変え、それを佐伯に向けていた。

「な、なんということだ。僕はこんなものを組み込んだ覚えはないぞ」

佐伯は言いながら後ずさりした。

フィルは佐伯に向かって飛びかかった。フィルの刃が佐伯の腹部を貫いて、鮮血が迸り、フィルと神谷の服に付着した。途端に、研究所は悲痛な悲鳴に包まれた。ただ一人、彼だけは一瞬不適な笑みを浮かべ、そのあとに表情を装った。

「ヒヤハハハ、オレハ自由ダ。ヒヤハハハ……」

フィルは狂ったように笑い出した。

「博士、しっかりしてください」

神谷は血を流しながら倒れている佐伯のもとに駆け寄った。フィルは機敏な動きで、研究所を出ていった。

「クソ、よくも博士を……」

神谷はフィルを追おうと立ち上がろうとしたが、佐伯に腕を掴まれた。

「博士」

佐伯はゆっくり首を振った。追うな、という意味らしい。

「追っても、ヤツには……追いつけん。クソ、失敗作か。神谷……これを」

佐伯はポケットから、鍵を取り出した。

「これは？」

「金庫の……鍵だ。そこに、フィルの、設計図が……入っている。停止の……方法も記されている」

佐伯は神谷の肩に手を置き、しっかり見据えた。目は赤く充血していた。

「フィルを……止めてくれ。このままでは……大量殺戮が起こってしまうかもしれない」

神谷は佐伯の手の上に自分の手を乗せ、

「はい。必ず止めます」

と、頷いてから言った。やがて血を吐くと、佐伯は眠るようにして目を閉じた。

金庫は研究所を出て、二つ隣の部屋にあった。そこは佐伯の個人部屋で、神谷が入ったことは一度もなかった。

神谷は鍵で、金庫を開けた。金庫は二重ロック式で、次に四桁のパスワードを入力しなければ開かない。神谷は既にそのパスワードを知っている。

1588 と入力すると、カチャリという音を立てて金庫の鍵が完全に外れた。

茶封筒が一つと、遠隔装置式と思われるコントローラーが入っていた。コントローラーには赤と青の二つのボタンがあった。赤が緊急停止ボタンで、青が始動させるためのボタンだった。

茶封筒の中にはA4判の紙が六枚とICチップが入っていた。神谷は中から六枚の紙を取り出した。それらにはフィルの設計図に、起動方と停止方が記されていた。神谷はそれを見て青ざめていた。

フィルの停止方は、二通りあった。一つはコントローラーの停止ボタンを押すこと。遠隔操作によって、フィルの電気信号が完全に遮断されるのだ。

そしてもう一つが、フィルの胸にある緊急停止ボタンを押すことだった。コントローラーが効かない時のために、非常用として設けたものだ。

神谷は、今、手にしているこのコントローラーでは、止めることができないとわかっていた。先ほどの行動が、原因である。

神谷は佐伯に隠れ、自らに従うためのプログラムをフィルに組み込んでいたのだ。

先ほど、自分が自作のコントローラーのボタンを操作したことによって、フィルの電気信号は神谷のコントローラーに従うようになった。当然、佐伯のコントローラーに反応を示すわけがない。

だが不覚にも、神谷は自分のコントローラーに停止ボタンをつけるのを忘れていた。いや忘れていたのではなく、つける必要がないと思っていた。ロボットが自分に従うようになれば、ロボットの動作を意のままに操れるだろうと考えていたのだ。だがそれは、浅はかな考えだったらしい。

暴走したフィルを、コントローラーで停止させることが、できなくなってしまった。つまり、本体の緊急停止ボタンを押すか、機械そのものを壊すしか、停止方法がないわけだ。

「クソ！」

神谷はポケットからコントローラーを出すと、それを投げ捨てた。こんな事態は想定外だった。

佐伯を殺し、彼の研究そのものを奪う。富と名声のために。それが彼の思い描いていたストーリーだった。ロボットが殺したことによって、それは事故として処理されるだろうと考えたのだ。佐伯を殺したまではよかったのだが、ストーリーは違う展開に転んでしまったようだ。

神谷はフィルの設計図を、乱暴にポケットに押し込み、部屋を出た。

やがて地上はフィルによって圧倒されていった。人はその圧倒的な力を見せつけられ、ただ指を加えて見るだけしかできなかった。この物語には、最悪の筋書きが用意されていた、と気づかされたのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9781e/>

アンダーワールド

2010年10月9日02時44分発行